

## 無心に見る

高山社会福祉士事務所 高山恵理子

ソーシャルワーカーがクライアントと関わる時、理解することが不可欠である。どのような課題があると思っているのか。どのように困り、どうしたいと考えているのか。そのことに、どのように対処してきているのか。さらには、クライアントはどのように生活しているのか、食事は？掃除は？洗濯は？仕事は？周囲の方たちとはどのように関係を作っているのか。それらについて、どのように思っているのか。生活するなかで、そして、生きていくなかで、何を大切にしているのか。そのことはその方にどのような影響を及ぼしているのか。そうして、その方はそれらのことをどのように表現しているのか。言葉による表現だけではなく、しぐさでの表現や、生活の場でのものの配置で。クライアントをめぐる、そのようなさまざまなことを理解しないで、クライアントに対して適切に関わること、的確な支援はできない。

にもかかわらず、クライアントを理解しようとするとき、自身の理解—先入観—が入りこむ。記録を書く際に、クライアントがどのような言葉を使って話していたか？逐語で思い出すことができず、『こんなふうなことを話していた』とソーシャルワーカー自身の言葉で表現をすることがある。このことは、自分の解釈を入れ込んでしまうことになる。そして、そのようなソーシャルワーカーの行為はその方の理解を遠ざけることになる。

このような経験の中で、「無心に見る」ことが、その方の理解にいかに大切であるかを痛感する。

2025年度末に大学を定年退職し、地域で成年後見を中心に活動を始めた。成年後見において、本人の尊重、本人が意思を決定するのを支援することは重要である。しかし、その方は、知的障害のある高齢の方である。何十年にわたる長い生活の中で、その方が培ってきた生活のあり方がある。専門職後見人がついたことで、急に意思を尋ねられても困惑したり、混乱するかもしれない。しかも、後見人は日常的にその方の近くにいるわけにはいかない。そのようななか、どのように支援を行ったらよいのか。

さっそく判断に迷いを感じる。そのような迷いに遭遇した際、真っ先に自身に問うのが「無心に見る」ことができているかということである。そこで起きていることを具（つづぎ）に一ひとつひとつを丁寧に、細部まで一みているだろうか？これまで、どのような場合にどのように意思を表出しているのだろうか。どのような「こだわり」を持ち、周囲の方とはどのように関わっているのか。生活の細かなことをどのように判断して、どのように行っているのか。

そして、ソーシャルワーカーは「価値」を大事にするが、時としてこの「価値」が先行しクライアントを「無心に見る」ことの妨げになることに気づかされる。「〇〇であるべきだ」という強い思いで、無心に見ることなしに、支援を行うとしたら、「価値」が先入観にもなりかねない。

その方とその方を取り巻く人・出来事・ものたちを無心に見ること。それはソーシャルワークの基本であるが、このことは本当に難しい……。しかし、この「無心に見る」ことなくして、それが何を意味しているのかを理解することはできず、結局、支援も不適切なものとならざるを得ない。実践において「無心に見る」ことの意味をあらためてかみしめる次第である。